

芦屋室内合奏団

第24回定期演奏会



芦屋教会館
(JR芦屋西10分、JR線南側)

'90. 6. 10(日) 午後2時開演

入場料 1,000円

ごあいさつ

昨年は皆様の暖かいご声援のもとに、定期演奏会を計画はいたしました、なにしろ名うての難曲に挑戦いたしましたため、開催のメドがつくにいたりませず、2年近くたち、久しぶりの演奏会となりました。

このたび芦屋室内合奏団も、創立から25周年の四半世紀を迎えました。ささやかなアマチュアの、ただ室内楽が好きというだけの集まりではありますが、毎月2回の練習に参集し、25年の永きにわたってのべ85曲にのぼる古今の名曲を演奏してこれましたことは、私達の人生にとって大きな意味を与えてくれ、また感慨もひとしおのものがございます。幸いまだ団員の意気も高く、汲めども尽きぬ音楽の世界ですので、25歳の青年と気を改め、さらに息長くアンサンブルの活動を続けてゆく所存でございます。

あらためて皆様のご声援に深く感謝いたします。

平成2年6月10日

芦屋室内合奏団 会長 橋本宗夫
 団長 鳥丸安雄
 部長 中田和夫
 団員 一同

芦屋室内合奏団メンバー

会長・Vn.	橋本宗夫	
団長・Vn.	鳥丸安雄	Vla. 河野建一
	藤本恭子	高橋由伸
	福永精一	中川啓子
	福永千江子	信田貞夫
	中田久仁子	V.C. 鳥丸直子
	尾野寿子	宮崎晴夫
	曾野和子	尾野耕造
	井上昌子	楠田敏二
		C.B. 中田和夫
		Chemb. 小津久子

プログラム

1. W. A. モーツァルト……………ディヴェルティメント ニ長調 K.136
W. A. Mozart (1756～1791)
アレグロ・モデラート
アンダンテ
アレグロ
2. J. S. バッハ……………ブランデンブルク協奏曲 第3番 ト長調 BWV 1047
J. S. Bach (1685～1750)
アレグロ・モデラート
アレグロ
- ~~~~~ 休 憩 ~~~~~
3. G. T. ホルスト……………弦楽のための組曲「セント・ポール」
G. T. Holst (1874～1934)
ジーク
オスティナート
間奏曲
終曲（ダーガソン）
5. A. シェーンベルク……………「浄夜」 op. 4
A. Schönberg (1874～1951)

◎指揮者 酒井睦雄

桐朋学園高校音楽科を経て昭和46年桐朋学園大学卒業。
その間、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F.フックス
各氏に、指揮を故斉藤秀雄氏、秋山和慶の両氏に師事。
昭和46年より相愛オーケストラ、49年より芦屋室内合奏団
指揮者、岐阜県交響楽団常任指揮者。昭和52年、ザルツブ
ルクにてO.スイトナー氏に師事、同年、東京にてS.チェリ
ビダツケ氏のゼミナールに参加。現在、相愛大学教授。

◎芦屋室内合奏団について

昭和40年に中島良能を中心に、関西の大学オーケストラの奏者14名によって結成され、団長橋本宗夫宅を本拠地として、月2回の練習、年1回の定期演奏会、合宿等を中心に地味ながら生きの長い活動を続けています。延原武春、M. Shoemakerらを指揮に迎えましたが、昭和49年から酒井睦雄を指揮者に迎え、コレリからブリテンにいたる古今の室内楽を愉しむほか、知名度の低い名曲を紹介するなど、ユニークな活動を行なっています。サラリーマンが中心で、夫婦で参加しているメンバーもあって、転勤で一度に2人が団を離れたたり、年々平均年齢が上昇して技術維持と練習参加が課題になるなど多くの困難に耐えて、練習の集まりにとどまらず家族ぐるみの親しい交流を通じて音楽を愉しんでいます。

今日の演奏曲目について

↑モーツァルト 喜遊曲 ニ短調 K.136

1772年9月、ザルツブルクの宮廷記録に「この年就任したコロレード大司教のもとに宮廷副楽長が来て、彼の息子である16歳のコンサートマスターの給金を上げてくれと頼んだ」とある。その年の初めにその少年が作曲した喜遊曲の出来が良かったことがその理由というが、大司教は聞き入れず、この生意気な若造とことごとく衝突し、後世悪者扱いされることになる。しかし、この重要都市の首長である大司教が、当時、馬番と同じ社会的地位の、駆出しの宮廷音楽家を粗末に扱ったからといって、非難するのは酷というものだ。ただその生意気な若者がヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトであったのが大司教の不運であった。

この16歳の春、モーツァルトは喜遊曲を3曲作っている(K.136-K.138)。この頃の彼のことでからおそらく一晩で作ったことだろうが、このK.136はそれらの中でも最もよく知られており、洗練された愛らしい美しさを持つ佳作である。他の2曲と同様、アレグロ-アンダンテ-アレグロの3楽章からなり、日頃の素行はともかく、青年らしい才気とともに音形の美しさが凝縮された、作曲技法上もすぐれた作品である。

↑バッハ ブランデンブルク協奏曲 第3番

大バッハは1717-1723年の間、ケーテンのレオポルト公の宮廷楽長をしていたが、その頃、大の音楽ファンであったブランデンブルクのルートヴィヒ公の依頼により、その宮廷楽団のために6曲の協奏曲を献呈した。いずれも以後の協奏曲よりは、イタリア風の合奏曲に近く、合奏のなかから独奏的にある楽器が浮かび上がったり、合奏同士が協奏する、という形式である。6曲それぞれに構成は異なっており、いずれも優れた作品だが、第5番とこの第3番が愛好されている。

曲はフリギア終止をはさむ二つのアレグロからなり、当時はこのつなぎの部分にその場に應じた別の曲やその一部が演奏されたらしい。(ちなみに、「フリギア終止」を事典でひくと、例としてこの曲のそれが引用されており、説明は何のこともわからないので、とりあえず「フリギア終止」としておく。)第1楽章にあたるアレグロは、きびきびとした主題で始まり、それぞれが3部に分かれたバイオリン、ビオラ、チェロに受け継がれてゆき、複雑、巧妙な対位法で展開されてゆく。中間部では暗い短調になるが、突然暗雲が吹き払われるように力強く主題が戻ってくる。終曲のアレグロは12/8拍子で、3台のバイオリンのカノンに始まり、他の楽器に次々と引き継がれてゆき、対位法の極致とも言えるべき巧妙さで、精緻、絢爛に展開されてゆく。円熟期の大バッハの面目躍如たる曲である。……うまくゆきますように。

↑ホルスト 弦楽のための組曲「セントポール」

ホルストは1874年に英国で生まれた作曲家で、初め父から、のち王立音楽院で作曲を学び、のちに王立音楽院の教授になった人である。わが国では組曲「惑星」のほか、この弦楽組曲くらいしか知られていないが、オペラ、合唱曲、協奏曲などに結構多作な人であつたらしい。その彼は終生、セントポールという女学院の音楽教師であった。その所在地名を取って「ハンマースミス」という前奏曲とスケルツォを残しているが、その学生の弦楽合奏を指導しているとき、彼女たちにふさわしい曲が少ない(そう、楽しめる弦楽合奏曲は少ないのです)ことに気づき、自ら筆を取ったのがこの曲で、「セントポール女学院のオーケストラのために」という副題がついている。しかし、決して女学生向けに手を抜いたものではなく、16世紀のマドリガルや英国の伝統的な民謡を主題にして、現代的に構成・処理された民俗的な香りの高い作品である。

曲は「ジグ」「オスティナート」「間奏曲」「ダーガソン」という標題を持つ4つの楽章からなっており、それぞれに、我々の耳にも覚えのある曲がちりばめられている。

↑シェンベルク「浄夜」

シェンベルクは「12音技法」の創始者として有名だが、近ごろ彼についての論評に、「12音技法は非人間的でない、難しくない、昔からあった」という論調が多いのが気になる。純粹に音の並びを楽しまず、歴史的評価や理論的説明を伴わなければ評価の枠組みを持たない、「知性化」の弊害が感じられてならない。人間の心理としての「知性化」を説明したのは天才フロイトであったが、彼もシェンベルクと同時代を生き、世紀末の芸術に多くの影響を与えた。ウィーンの前奏曲はザンクト・シュテファン寺院を中心に、ヨーロッパ近代史の中心であったハプスブルク家の栄華を伝える石の建築物が並んでいるが、王宮の別館であった美術史美術館に入ると、その正面の壁面はまぎれもなくクリムトであり、暗殺された皇太子の居城であったベルベデーレ宮はオーストリア美術館となり、クリムト、エゴン・シーレ、ココーシュカが人气的である。市街の中心地であるカールス・プラッツ駅の駅舎はotto・ワグナーの作で、古い容器の中に彼らの世紀末の芸術がその色濃く残されている街である。

シェンベルクはその世紀末の芸術のまっただ中に生きた作曲家で、1874年にウィーンで生まれ、独学で作曲を勉強し、ヨーロッパ各地で教職についたのち、ナチスの支配を避けてアメリカに移住して、1951年カリフォルニアで歿した。その技法はほぼ3期に分かれ、12音技法や無調性と言われるのはその後半であり、前半はワグナーを受け継ぎ(「グレの歌」)、ヨハン・シュトラウスやブラームスの作品を編曲し、みずから伝統主義者出任していた。

「浄夜」は彼の任世作で、リヒアルト・デーメル(最初の日本訳は森鷗外)の一節(今日は田村万里さんの訳を付けましたのでご覧ください。)に啓発されて作曲した、「音詩」である。最初は弦楽6重奏曲として作曲され、1903年に初演されて好評を博し、彼自身も気に入ったらしく、1943年に弦楽合奏用に編曲して、終生、指揮する際のレパートリーとしていたという。決して「無調性の結晶」なんではなく、ニ短調で始まりニ長調で収束する、立派な調性の音楽である。全体は5部に分かれるが、「冷たい森の中を歩いて行く恋人たち」のテーマがビオラで始まり、次々と情緒的な旋律で、恋人たちの心の揺れ動きを情熱的に描きだす。「寂しく」だとか、「打ちひしがれて」「喜びに満ちて」、など、彼のロマンチック志向を演奏者に求める発想記号に彩られた、音の詩である。デーメルはこの詩を聴いて、「私のコトバが今、鳴り響く!」と言ったという。やはり、「シェンベルクの言う、すべての調性を含む、という意味の汎調性を否定的な、調性がない、という意味にしてしまった不幸」「協和音しかなかった時代を越えて不協和音を表現手段にしたのと同様」というグラウトのコトバ(「西洋音楽史」-ノートン音楽史シリーズ、友社刊)を正解としよう。


~~~~~ 芦屋室内合奏団定期演奏会の歩み ~~~~~

第2回 1967年1月 芦屋市民会館

バッハ……………バイオリン協奏曲 No.2  
 ビバルディ……四季より「秋」  
 レスピーギ……リュートのための古代舞曲とアリア  
 バーバー………弦楽のためのアダージョ  
 指揮 中 島 良 能  
 バイオリン 鈴 江 苑 生

第3回 1967年7月 芦屋市民会館

ビバルディ……合奏協奏曲 OP.3-11  
 バッハ……………ピアノ協奏曲 No.1  
 チャイコフスキー・弦楽のためのセレナード  
 指揮 中 島 良 能

第4回 1968年2月 芦屋市民会館

コレリ……………サラバンド ジーグ バディヌリ  
 バッハ……………オーボエとバイオリンのための協奏曲  
 モーツアルト…オーボエ四重奏曲 K.370  
 アリテン………シンブル・シンフォニー  
 指揮 宮 本 政 雄

第5回 1968年11月 芦屋市民会館

ビバルディ……四季より「冬」  
 ボッケリーニ…チェロ協奏曲  
 モーツアルト…ディベルティメント K.138  
 指揮 中 島 良 能

第6回 1969年9月 芦屋市民会館

パーセル………組曲「アプデラザール」  
 パーセル………トランペットと弦楽のためのソナタ  
 テレマン………3つのバイオリン、弦楽と通奏低音のための協奏曲  
 指揮 延 原 武 春

第7回 1971年11月 夙川公民館

ヘンデル………合奏協奏曲 OP.6-2  
 ビバルディ……合奏協奏曲 OP.3-12  
 ドボルザーク…弦楽のためのセレナーデ  
 指揮 奥 田 伸 吾

第8回 1972年11月 芦屋カトリック教会

ビバルディ……調和の靈感 OP.3-10  
 ビバルディ……調和の靈感 OP.3-3  
 バッハ……………ブランデンブルグ協奏曲 No.3  
 モーツアルト…戴冠ミサ曲  
 指揮 M. H. Shoemaker

第9回 1973年12月 芦屋市民会館

コレリ……………合奏協奏曲 OP.6-1  
 グリーグ………ホルベルグ組曲  
 スーク………弦楽のためのセレナード OP.6  
 指揮 M. H. Shoemaker

第10回 1974年5月 芦屋仏教会館

コレリ……………合奏協奏曲 OP.6-7  
 バッハ……………2つのバイオリンのための協奏曲  
 ヘンデル………合奏協奏曲 OP.6-5.9  
 指揮 M. H. Shoemaker

第11回 1975年5月 芦屋仏教会館

パーセル………組曲「アプデラザール」  
 モーツアルト…ディベルティメント K.136, K.138  
 ビバルディ……四季より「春・夏」  
 ヘンデル………合奏協奏曲 OP.6-6  
 指揮 酒 井 睦 雄

バイオリン 曾我部 千恵子

第12回 1977年6月 芦屋仏教会館

ビバルディ……四季より「秋・冬」  
 テレマン………組曲 イ短調  
 レスピーギ……リュートのための古代舞曲とアリア  
 バッハ……………組曲 第2番  
 指揮 酒 井 睦 雄

フルート 白 井 美和子

第13回 1978年12月 芦屋仏教会館

コレリ……………合奏協奏曲 OP.6-1  
 ヘンデル………合奏協奏曲 OP.6-1  
 モーツアルト…アダージョとフーガ K.546  
 グリーグ………ホルベルグ組曲  
 指揮 酒 井 睦 雄



第14回 1979年11月 芦屋仏教会館

ヘンデル……合奏協奏曲 OP. 6-3  
エルガー……弦楽のためのセレナーデ OP. 20  
ドボルザーク……弦楽のためのセレナーデ OP. 22  
指揮 酒井 睦 雄

第15回 1980年11月 芦屋仏教会館

モーツアルト……ディベルティメント K. 136  
ホルスト……弦楽のための組曲「セントポール」  
ボッケリーニ……チェロ協奏曲  
モーツアルト……セレナータ・ノッテウルナ K. 239  
指揮 酒井 睦 雄  
チェロ 齊 藤 遥 男

第16回 1981年11月 芦屋仏教会館

ビバルディ……合奏協奏曲 OP. 3-11  
ヘンデル……合奏協奏曲 OP. 6-5  
バッハ……プレリュード ロ短調  
コレリ……合奏協奏曲 OP. 6-6  
バルトーク……ジューベンブルゲンの踊り  
指揮 酒井 睦 雄

第17回 1982年11月 松蔭女子学院大学チャペル

モーツアルト……喜遊曲 K. 136  
モーツアルト……クラリネット五重奏曲 K. 581  
モーツアルト……喜遊曲 K. 334  
クラリネット / 指揮 酒井 睦 雄

第18回 1984年11月 松蔭女子学院大学チャペル

テレマン……組曲「リラ」  
ハイドン……自動オルガンのための3つの小品  
ハイドン……オルガン協奏曲 第2番  
ベールマン……クラリネットと弦楽五重奏のためのアダージョ  
ニールセン……小組曲 OP. 1  
レスピーギ……リュートのための古代舞曲とアリア 第3組曲  
クラリネット / 指揮 酒井 睦 雄  
オルガン 鈴木 雅 明

第19回 1985年9月 松蔭女子学院大学チャペル

バッハ……ブランデンブルグ協奏曲 No. 3  
モーツアルト……クラリネット五重奏曲  
モーツアルト……交響曲 第29番  
モーツアルト……ディベルティメント K. 136  
クラリネット / 指揮 酒井 睦 雄

第20回 1986年11月 松蔭女子学院大学チャペル

モーツアルト……ディベルティメント K. 137  
ヘンデル……合奏協奏曲 OP. 6-6  
スーク……弦楽のためのセレナーデ OP. 6  
指揮 酒井 睦 雄

第21回 1987年6月 風月堂ホール

アルビノーニ……シンフォニア No. 3  
テレマン……組曲 No. 1  
バガニーニ……弦楽合奏のためのロンド  
バーバー……弦楽のためのアダージョ  
ヤナーチェク……弦楽合奏のための組曲  
指揮 酒井 睦 雄

第22回 1987年11月 ラボルテホール

バッハ……管弦楽組曲第3番より  
モーツアルト……アイネ・クライネ・ナハトムジーク  
ボロディン……ノクターン  
シュトラウス……トリッチ・トラッチ・ポルカほか  
レハール……ワルツ「金と銀」  
指揮 酒井 睦 雄

第23回 1988年9月 松蔭女子学院大学チャペル

シュターミッツ……マンハイムシンフォニア 第1番  
グルック……歌劇「ドン・ジュアン」より  
アルビノーニ……弦楽のためのソナタ 第5番  
バッハ……2台のヴァイリンのための協奏曲  
ジェミニアーニ……合奏協奏曲「ラ・フォリア」  
指揮 酒井 睦 雄

## 浄められた夜（詩集『女と世界』より）

枯れ果てた、冷たい野づら行く者がふたりいる。  
月が共に従い、二人はそれを仰ぐ。  
小高い柏の梢に月は懸かり、  
陰さす雲とてない白銀の光のなかには  
黒い間垣が影を落とす。  
おんなの声が語り始める。

私のはらむこの子はあなたの子ではありません。  
あなたと歩む私は罪に墜ちた女。  
私がこまれで為してきた罪は重く、  
幸いを望むべくもなく。  
とはいえ私が強く焦がれたのは  
生を満たすもの、母である幸福、  
そして母たる務め。私は歓喜し、  
おののきながら私の性を  
見も知らぬ男の抱くに任せた。  
それで恵みを受けたのです。  
ところがいまや、生の報いを受ける身となって、  
あなたに、あなたに出会ったのです。

おぼつかぬ足取りで二人は歩む。  
見上げれば、月が従い、  
二人の暗いまなざしは光の中に溺れる。  
男の声がつぶやく。

おまえが宿したその子が  
おまえの心の重荷にならぬように。  
ごらん、宇宙の透明なかがいよを。  
万物の上に一面の光がある。  
おまえは冷たい海の上を私とともにさまようのだが、  
不思議なぬくもりが漂ってくる、  
おまえから私に、私からおまえへと。  
そのぬくもりが見知らぬ子を浄めるだろう。  
ぼくのために、ぼくによって産むその子を。  
おまえがぼくの中に輝きをもたらし、  
ぼくをそのまま子供に変えてしまったのだ。

おとこは女の張り詰めた腰を抱き、  
ふたりの息は風の中でくちづけ合う、  
気高く、澄みきった夜の中に行く者がふたりいる。

### リヒャルト・デーメル

1863年11月18日生、シレジア出身の林務官の子弟として生まれる。  
20歳までてんかん性の発作に悩む。1882年より1887年まで大学で  
経済学、社会学、哲学、自然科学を学び、1887年に哲学博士の学位を  
取得する。編集者として働き、1894年にピアバウム、マイヤー＝グ  
レーフェらとユーゲント様式の代表的な雑誌『パーン』（牧神）を発刊。  
1895年から作家業に専念。1902年諸外国を旅行しハンブルクのブラ  
ンネーゼに住む。兵役の後静脈炎を病み、1920年血栓症で死亡する。  
詩集：Erlösungen（1891）、Aber dei Liebe（1893）/  
Lebensblätter（1895）ほか